

◆落慶法要（落成式）

連載させて頂いております『日本建築伝統儀式』も、いよいよ結びの『落慶法要（落成式）』の紹介となります。

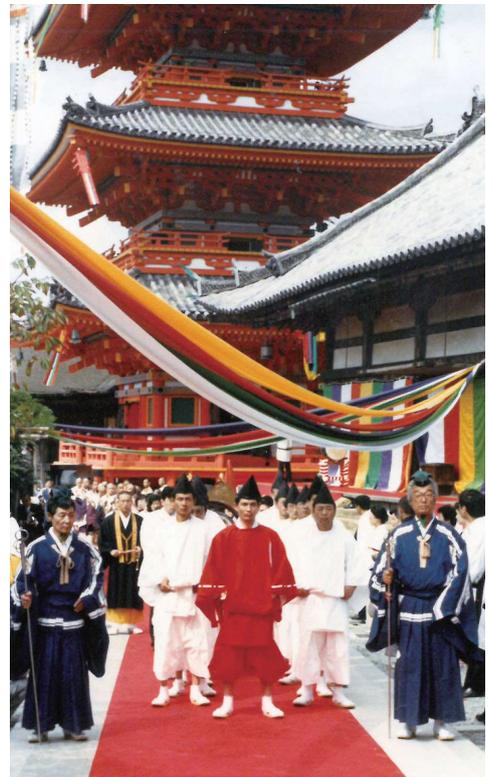
今から約1400年以上前の飛鳥・白鳳時代（538〜710年）に、仏教と共に朝鮮半島や中国大陸から移住した工匠によって、仏寺を建てる技術が日本に伝わって参りました。仏教を日本に伝えたのが聖徳太子であると言われており、寺院建築の発祥も法興寺からとされております。そして、現在にも残る仏寺建築はここから始まり、恐らく日本建築の寺院関係儀式もこれに伴って始まったものと思われまます。世界遺産にもなる建物と技術は現在にまで残されておりますが、残念ながら当時の建築儀式は残されておられません。恐らく、きちんと儀式をして寺院を建立し、落慶を厳修したに違いありません。

ちなみに、神社の方では、伊勢神宮における式年遷宮が1300年前から20年ごとに実施されてお

通算
第26回

未来に伝えたい 日本建築伝統儀式

たご かずのり
田子 和則
田子式規矩法大和流六代目 棟梁



清水寺三重塔落慶法要 真中の赤礼服が筆者

ります。国民の幸福を願う大きな目的のほかに、儀式を行い、技術の伝承することにより、自然の恵みを尊び、自然環境の循環を大切に、山・海・川に感謝し、国民一人一人が心を一つにして、作物を育て健康で生きていく、その気持ちを表すのが式年遷宮の儀式であると私は思っております。

私は、今からちょうど30年前（35歳）の時、京都清水寺三重塔落慶法要の式典において、宮大工の儀式を棟梁として奉仕させて頂きました。これが、私にとって『宮大工古式伝統保存会』を設立したきっかけとなり、儀式の大切さを改めて知ることとなり、この時点から私の生き方や考え方を教えて

頂く良い経験となりました。様々な人々からご縁を頂き、まだまだ修行中でございますが、色々な建築にも携わることが出来ました。何よりも、5年前にお亡くなりになるまでの永きにわたり、当時の貫主、松本大園親下にご指導頂いたこと、素晴らしい人と人とのご縁を頂いたことが今の自分の礎と



だいえんげいか
故大園親下にご指導賜る著者

なっております。

「塔に黙って入ると末代崇る、塔建築に携わると末代まで良いことがある」

昔からこのような言い伝えがあるのと聞いたことがあります。それは、三重塔、五重塔、七重塔、十三重塔のいずれもが塔婆であり、仏様の仏舍利を祀っているのが塔であります。今まで様々な落慶式を拝見し、参加もさせて頂きました。それぞれがとても良い経験になりましたが、これから紹介する清水寺三重塔の落慶は、この30年の間には経験がない程素晴らしい儀式であり、ぜひとも未来に伝えたい伝統の儀式として、3回にわたりご紹介させて頂きます。当時の新聞やテレビでも報道、放映されましたので、ご覧になられた方も沢山居られると思います。参考にして頂き未来に伝えて頂ければ幸甚に存じます。

◆ 清水寺三重塔落慶法要

清水寺は総高30メートル、本瓦葺きの大型三重塔であります。

創立が平安時代に遡る古寺で、

創建以来、数回にわたる火災に遭い、三重塔は寛永9年、今から380年ほど前に再建され、昭和62年に建立当時の鮮やかな彩色を再現し、修理して落慶を行いました。

バランスの良い木割は江戸時代初期に復興され、当時の復古様式を代表するもので、内外の要所を彩る極彩色は丹塗に映え、近世初頭の華やかな時代を反映した建物であったと文化庁の内田様(当時)が申されておりました。落慶以来、その姿は夜になるとライトアップされ、日本人はもとより世界中の人々を楽しませ、祈りを捧げて頂いております。

昭和62年10月1日より3日間、荘厳に厳修されました三重塔落慶法要の日程とその内容をご紹介します。

三重塔落慶法要

昭和62年10月1日
午前10時30分
三重塔落慶法要・塔莊嚴幕開頭

・読経
・宮大工の壽

午前11時 本堂

松本貫主導師による落慶法要
観音霊場会長 鷺尾石山寺座主 観下による花山法皇一千年記念法要
奉納 能「田村」
舞楽「振鉾・賀殿・万歳楽」

三重塔落慶中日法要

10月2日
午前10時30分
三重塔落慶法要・塔莊嚴幕開頭

・読経
・宮大工の壽

午前11時 本堂

三重塔落慶中日法要
奉納 能「花月」
雅楽・舞楽
「越天楽・蘭陵王・納曾利」

三重塔落慶結願法要

10月3日
午前10時
三重塔落慶法要・塔莊嚴幕開頭

・読経
・宮大工の壽

午前10時30分 本堂
三重塔落慶結願法要
奉納 狂言「居杭」

雅楽・舞楽
「還城楽・抜頭・長慶子」

本番前のリハーサル風景



19人の宮大工と筆者、五代目光一郎(父) 演出家の内川清一郎氏にご指導を賜りまして、詳細にご紹介いたします。

次回には三重塔の落慶儀式について、詳細にご紹介いたします。

◆ 清水寺三重塔落慶

(その2)

前回(第26回)では、清水寺三重塔の歴史や経緯についてご説明申し上げました。今回は、この三重塔の落慶の詳細についてご紹介いたします。

昭和62年に行われました清水寺三重塔の修理の中心は、建立当初の華やかな色彩を調査し、内外ともその色彩を再現するためのものでした。350年振りの解体修理が見事に完成して、当時の美しい華麗な姿に蘇りました。

私は、その3日間に及ぶ荘厳な落慶式の式典に参加させて頂きました。宮大工棟梁として、会行事と共に入道上の列を先導し、普段は開かずの門とされる重要文化財西門に続く階段を上がり、十九名の宮大工・御詠歌隊・信徒総代・西国三十三所霊場の山主猊下、そして落慶法要を勤修されます清水寺貫主・松本大圓猊下をご案内する役目を授かりました。そして西門をくぐった処から、三重塔落慶を祝う『宮大工の壽』の儀式を務めるよう仰せつかりました。当時、私はまだ若く修行中でした。



通算 第27回 未来に伝えたい 日本建築伝統儀式

たごかずのり
田子 和則

田子式規矩法大和流六代目 棟梁



清水寺三重塔落慶法要初日の記念撮影

たので、身に余る栄誉でありながらも、正直、大変な役目を引き受けてしまったと思いました。

そもそのきっかけは、清水寺三重塔の落慶式を取り仕切り、総監修をされました演出家・内川清一郎先生とご縁を頂いて、平素からご指導頂いていたことによるものでした。そしてある日、内川先生のご紹介で、法隆寺・薬師寺再建に携わられた西岡棟梁をご紹介賜り、西岡棟梁から直接ご指導を頂けるようになりました。

これは当時の私にとって夢のようなことでした。法隆寺の棟梁として知られる西岡棟梁から直接指導を受けることは、宮大工としてこれほどの名譽はありませんでした。

た。西岡棟梁は私の仕事に対してもご指導をして頂き、特に自然に對しての考え方を強調して「木の癖を読み、木組みをどの様にするか」、「一人では千年を持たせる事はできない、工人の心を一つに束ねることこそが特に大切だ」と教えて頂きました。また、10通以上のお手紙と色紙も頂戴して、儀式の大切さについても教わりました。そして何度もご指導頂くようになり、古来の儀式についてもご教授頂きました。内川先生は、薬師寺の信徒総代でもあり、西岡棟梁とは昵懇の仲でありました。また、清水寺の貫主松本大圓猊下とは同級生でありました。

この様なご縁から、この清水寺三重塔落慶の話の頂いたのですが、当時の私にはあまりにも荷が重すぎて一度はお断り申し上げました。しかしながら、内川先生と松本大圓貫主からもご依頼を頂きまして、未熟者ではありますが、不思議なご縁に導かれるままに、引き受けさせて頂くことになった次第です。

さて、落慶法要の説明に戻りますが、この素晴らしい落慶法要の

司会は団塊世代にはおなじみの元NHKアナウンサーの大塚利兵衛さんが務められました。大塚さんは、松本大圓貫主と戦友の仲でいらっしやったそうです。

大塚さんの司会のご挨拶の一声と同時に、ご参列の皆様が、重要文化財である三重塔落慶に相応しい、何とも言えない良い緊張感とでも申しましょうか、大塚さんの声を聞いただけで全員が心一つになれる、そのような緊張感を30年経った今でもはつきりと思い出します。

大塚さんの素晴らしい挨拶と説明の後、大講堂から入道上の列は西門を目指し出発、西門は普段は閉鎖されておりますが、この三重塔落慶にあたり、初日は50段程あ



入道上の列 西門階段を上る会行事と宮大工



松本大園狛下を始めとする入道上の列

中川宮司様の雅楽が奉納され、入道上のそれぞれの位置に列が配列されます。ちなみに棟梁は三重塔正面左脇の位置に配置されます。全員が所定の位置についたところで、司会者の発声、

「ただ今より清水寺三重

塔落慶法要の勤修を行います。恐れ入りますが皆様、ご起立の上、合掌をお願い申し上げます」

（全員、起立して合掌）

「ご着席ください」

続いて大西執事長さんの発声で、

「開式の鐘」

（境内の鐘楼の鐘が鳴り響く）

ここで、三重塔上層を覆っております、五色の荘厳幕の除幕用の紐を、ご来賓並びに信徒代表の方々が受け取り、司会の大塚さんの「荘厳幕開頭」の合図と共に、ファンファーレが鳴り響き、荘厳幕が落とされま



荘厳幕開頭（そうごんまくかいけん）



三重塔正面左側に位置を取る棟梁（筆者）

ここで司会の大塚さんから説明があり、「荘厳幕が開かれまして、大瓦葺きの三重塔が全容を現しました。この荘厳幕は仏旗とも呼ばれておりますが、ご覧のように五色に染め分けられております。世界仏教会議で定められたとされておりますが、極楽浄土に導かれる五色の糸もこの色が使われております。それぞれの色の意味は、青緑が知恵を表し、黄色は精進、赤は念ずる、白は信、紫は本来は黒でございますが、心の動揺を静める意を表すとされております」と説明されました。

この続きは第28回日本伝統儀式、清水寺三重塔落慶（その3）にてご紹介いたします。

清水寺三重塔落慶

(その3)

前回(第27回)では、三重塔落慶の『開式の鐘』が鳴り、三重塔上層を覆っております。荘厳幕を開く『荘厳幕開頭』までご説明致しました。今回は最終『宮大工の壽』までをご説明申し上げます。儀式の情景を思い描いて頂けるよう、司会の大塚利兵衛さんの進行と説明の言葉を引用させて頂き、ご紹介して参ります。

◆お鍵渡しかぎの儀

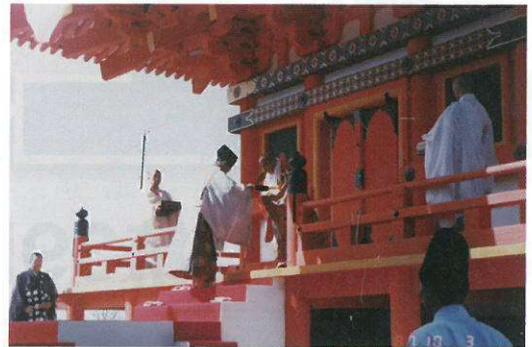
『荘厳幕開頭』に続く、『お鍵渡しかぎの儀』についての説明に移ります。

350有余年の歴史を歩み、この度見事に修復になりました三重塔の扉が只今から開かれます。まずは扉の鍵が、可愛いお稚児さん達によってリレーされ、信徒総代に手渡されます。いずれも清水寺の門前にお住いの、当時小学5・6年生のお嬢様方から信徒総代に渡され、そして総代より、清水寺松本貫主に渡され、貫主が確かに受け取りましたとご挨拶されます。



未来に伝えたい 第28回 日本建築伝統儀式

田子式規矩法大和流六代目 棟梁 田子 和則



信徒総代より松本貫主に鍵が渡される

司会 「鍵は松本貫主へ渡されました」

万葉集に『青によし』と詠われた時代が再現されたかのような佇まいたてまいの中を、松本貫主はゆつくりと回廊を一巡されました。

司会 「宮大工の皆さん、壇上にお上がりをお願いします」

(宮大工、壇上へ上がる。貫主より鍵を手渡される)

これから宮大工さんの手により、東そして南、北の扉の鍵が開けられます。

司会 「開扉かいひ」

(開扉と共に音楽が流れる)



宮大工による開扉

内陣の素晴らしい壁画や模様、再び甦よみがえる中、松本貫主は塔内、内陣に入られました。これより、燈火とお華・お香がお稚児さん達によって供えられます。

(笛の音と共に雅楽が奏でられる) 燈火が内陣に点ぜられ、続きまして、献香けんこう献華です。内陣では、松本貫主による御本尊への祈願が始まっております。

司会 「ただ今から大導師だいだうしが御本尊ごほんぞん 大日如来だいにとちによらいに對し、御真言ごしんごんを唱えられます。大導師が第一声『南無大日如来』とお唱えになりました後、皆様も同じように『南無大日如来』とお唱えをお願い致します。

す。その後六回続けて唱和をお願い致します」

司会

「続きまして、読経で御座います。会奉行の般若波羅蜜多心経の第一声に続きまして、皆様大きな声で御唱和下さいます様お願い致します」

西国三十三所霊場の山主狛下から散華が撒かれました。続いて三重塔上層からも散華が撒かれております。

◆ 宮大工の壽

司会

「続きまして宮大工の皆さんによる壽唄で御座います。遠く明治を迎えるまでの神仏混淆の時代に遡りまして、只今より田



宮大工の壽唄 中川宮司、筆者、内川先生

子と則宮大工から地主神社 中川平宮司にご挨拶申し上げます」
田子、西門の前まで進み、中川宮司にご挨拶申し上げ、本日三重塔落慶を祝い、扇子を翳し、宮大工壽唄を奉納。



宮大工棟梁（筆者）の千歳楽、万歳楽



脇棟梁以下 18名での千歳楽、万歳楽

『揺るぎなき 下津磐根に真木柱
永遠に壽ぐ 常盤堅盤に』
永遠にからは2回繰り返して壽唄を奉納します。

● 千歳楽 万歳楽

三重塔両脇に脇棟梁筆頭に9名ずつ18名を配置し、棟梁が扇子を開いて額から前に翳し『千歳楽』と唱える。すると、脇棟梁以下18名が扇子を翳し『千歳楽』と唱える。同じく棟梁『万歳楽』、脇棟梁以下全員『万歳楽』と唱える。

● 祝い手締め

棟梁が一步前に出て三重塔に一礼し、両手を前に突き出し参加者全員に呼びかけるように朗らかな掛け声で、

『祝い手締め いよーっと』

三本（宮大工の手締め）

三本の後、間を開けず田子棟梁、天に届くように、

『おめでとございます』

『おめでとございます』（宮大工全員）

司会

「天上から散華が舞っております中を、皆様ご起立の上、合掌をお願い致します。ご着席をお願い致します。」



本堂に向けてのお練り 松本貫主他

華々しく、そして力強い手締めの後、ただ今の惣礼を持ちまして、三重塔における落慶法要をお開きとさせて頂きます。

この後本堂での落慶法要に移らせて頂きますので、法要参列者の来賓の方々には役員の方内によりまして本堂にお進み願います。

ただ今から西国三十三所観音霊場山主狛下をはじめ、御詠歌隊の皆様、宮大工の皆様が本堂に向けて進まれます。お練りが始まります。恐れ入りますが、本堂までの通路をお開け下さいます様、お願い申し上げます。ご参列の皆様、長時間に亘りまして大変ありがとうございます。

以上、三重塔落慶法要をご紹介申し上げます。